

資料

職業的発達過程の類型化の試み

——仕事への志向性と心理・社会的発達との関連から——

望月 葉子*

AN ATTEMPT IN CLASSIFYING CAREER DEVELOPMENT PROCESSES
—— In Relation to Orientation to Work and Psycho-social Development ——

Yoko MOCHIZUKI

The purpose of this study was to investigate the career development process. The item categories of the career development and the psycho-social development were administered to 481 junior high school students, 662 senior high school students and 256 university students. A factor analysis of 50 items on the career development indicated 3 factors of career development. Then, the signs of the factor scores were combined to classify the subjects into 8 types of career development: Type A-Work commitment (high intention of self-realization=H), Type B-Role exploration (H), Type C-Evaluation criteria acceptance (H), Type D-Work alienation (H), Type E-Work commitment (low intention of self-realization=L), Type F-Role exploration (L), Type G-Evaluation criteria acceptance (L), Type H-Work alienation (L). The main findings were as follows: (1) The career development types could be interpreted by the psycho-social development factors; (2) Changes in career development patterns corresponded to age; (3) Career development proceeded in the order to Type A, B, E, F, C, D, G, and H.

Key words: career development process, type, vocational socialization, adolescence.

Havighurst は発達課題の中に職業を位置づけ、青年期の発達課題として「職業を選択し準備すること」(1953), 「生計を立てる意味でキャリアに備えて用意すること」(1972), また成人前期の発達課題として「職業生活をスタートさせること」(1972)をあげている。その発達課題論は広く発達全般を取り扱うもので、これらの課題に対応する職業行動の特質を詳細に記述していない。

Super (1957) は職業的発達を個人の発達の1つの側面にとらえ、社会的・情緒的・知的発達と同じ様に個人の一般的発達の特徴を備えているとした。すなわち、職業的発達について、一時的・短期的な職業選択や職

業適応としての職業行動ではなく、生涯を通して発達するものとしてとらえることの必要性を指摘している。

これまでも職業的発達の程度を評価するために、さまざまな尺度が考案されている。それらには、職業生活に必要な個人的特性をどの程度備えているかに着目して尺度を構成しているものが多い。(Crites, 1974; 竹内, 1979; 中西・竹内・那須, 1980; Super, 1983)。日本における先行研究をみると、中西他(1980)は自発性・独立性・計画性・その他の側面から、また竹内(1979)は、自律度・関心度・計画度の側面から個人の職業的な特性の測定を試みている。個人の職業的発達は、これら特性についての測定結果の総和として表わされるが、教育指導上、具体的な指導内容との対応は明らかにされていないとはいいたい。

* 東京学芸大学 (Tokyo Gakugei University)

一方、加部(1982)は、教育実践の立場から学校教育における「勤労観」の形成を重視した独自の理論を提案している。この理論は、勤労観を自己実現性・社会性・目的自覚性・効率性・経済価値性の5つの側面に分け、それぞれについて、その形成を測定するものである。加部の測定項目群は学校教育における進路指導の永年の実践を通じて積み上げた経験に基づいて吟味・選択されたものである。それはまた、小学校高学年から高等学校までの児童・生徒を対象として、職業的発達を「勤労観」の形成としてとらえた5段階：「(1)自分の行動の効果を自覚する」「(2)仕事の効果を自覚する」「(3)自主的な仕事の効果を自覚する」「(4)勤労の自覚をする」「(5)勤労の効果を自覚する」の枠組みと対応している。この測定項目群は、仕事への志向性を表わしているものと理解できる。

Munley(1975)は、Eriksonによって示された自我の心理-社会的発達を職業選択および職業的成熟と関係づけて、各発達段階ごとに心理-社会的発達が職業行動と重要な関わりを持つことを実証的に明らかにしている。その後、Munley(1977)は、職業的発達を人間の発達全般に統合する統一的な理論は、それまでになかったことを指摘した。しかし、Eriksonの理論は発達の中で職業的関連領域を強調するライフ・ステージ概念を作り上げていること、すなわちEriksonの理論は全生涯に及ぶ人間の発達と職業的発達とを統合するための枠組みとなりうる理論でもあることも併せて指摘している。

このことから、職業的発達の過程を明確にしていく上に、自我の心理-社会的側面の発達との関連を明らかにすることは有効と思われる。ところが、職業的発達についてこれまでの研究の焦点は、職業興味・選職動機・職業選択・意志決定・適応・職務満足などの職業に関連した限られた領域に当てられていた。職業的発達を自我の発達と関連づけて統合的に理解する試みは乏しく、また、自我の発達と職業的発達の過程が直接どのように対応しているのかについて実証的に解明されているとはいいがたい。

本研究は、自我発達との関連において職業的発達を考察することを目的としている。そのため、第1に、職業的発達を「勤労観」の形成に基づく類型間の推移としてとらえ、第2に、個人の自我発達の中に位置づけて職業的発達の類型化を試みるものである。

そこで、類型化を試みるにあたり、職業的発達の測定については、加部(1982)の勤労観の形成に関する項目群を用いた。その得点は加齢に伴う増加の傾向があ

ること、しかし、性差があることが確認され、性によって職業的発達の過程が異なること、単純な増加傾向ではないことが示唆された(望月, 1988)。

また、職業的発達を規定するものとして、心理-社会的発達との関連から検討を試みた。なお、学童期から青年期にわたる心理-社会的発達の測定は、Eriksonの8段階のライフ・ステージに対応する自我発達測定尺度を各段階において作成した遠藤らの一連の研究(遠藤他, 1976)の成果に基づいて行った。

本研究の目的は、以下のとおりである。(1)職業的発達の構成因子を検討する、(2)職業的発達過程の類型化を試みる、(3)年齢的推移と類型との関係について性と関連で明らかにする、(4)それぞれの類型について、Eriksonの心理-社会的発達との対応について検討する。

方 法

調査対象 東京都内中学校2校・高等学校3校・東京および近郊国立大学2校。被験者はTABLE 1に示した。

TABLE 1 学年別男女別人数

| 学校段階 性 | 中 学 | | | 高 校 | | | 大学 | 計 |
|-----------|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|
| | 1年 | 2年 | 3年 | 1年 | 2年 | 3年 | | |
| 男 子 | 107 | 105 | 98 | 93 | 101 | 82 | 166 | 752 |
| 女 子 | 61 | 58 | 52 | 131 | 122 | 133 | 90 | 647 |

調査時期 1987年5月～7月

手 続

①職業的発達の測定

加部(1982)が、職業的発達の5段階のそれぞれについて設定した総計50項目について、学習の達成の程度を5件法で回答を求め、それぞれの回答に対して5点から1点の得点を与えた。さらに、項目群を検討した。

②心理-社会的発達の測定

遠藤(1981)が自我発達の学童期について設定した19項目・青年期について設定した19項目について、中学生が理解できるように検討し、「まったくそのとおりである」から「まったくそうではない」までの5件法で回答を求め、それぞれの回答に対して5点から1点の得点を与えた。さらに、項目群を検討した。

結果と考察

1. 類型化

①項目群の検討

職業的発達・心理-社会的発達（学童期・青年期）の項目分析を中学校・高等学校・大学の各学校段階別に行った。項目分析としては(1)平均値の年齢的推移、(2)「どちらともいえない」という選択肢への集中、(3)上位群・下位群の間の有意差を検討した。複数の学校段階において上記の3基準に従って不適切な項目を削除した。

このような条件によって削除した項目は心理-社会的発達の青年期の2項目のみであった。

②因子分析の結果：職業的発達

職業的発達の項目群について、主成分分析によって3因子を抽出してバリマックス回転を行った。各項目および因子負荷量をTABLE 2に示した。因子分析の結果と加部の発達理論との関連は以下のようになる。

TABLE 2 職業的発達項目群と因子負荷量

| 項目 | I | II | III | h ² |
|--|-----------------|---------------|---------------|-----------------|
| 職業生活を通して達成したい人生の目標を考えたことがある | .72 | .10 | -.00 | .53 |
| 人生の目標を達成するために、やる気を出す条件は何かを考えたことがある | .69 | .11 | .11 | .50 |
| 自分の将来の夢や希望を実現するための計画について考えたことがある | .65 | .12 | .01 | .44 |
| 将来の職業生活で、成功するための条件を考えたことがある | .65 | .17 | .11 | .47 |
| 社会の一員として社会に参加するために、どのような方法があるかを考えたことがある | .63 | .21 | .07 | .45 |
| 職業人として仕事の効果をあげるための条件を考えたことがある | .62 | .09 | .25 | .45 |
| いろいろな職業の中で、自分が持っている目標を達成できるかどうかを考えたことがある | .59 | .21 | .03 | .40 |
| 希望する職業につくために、これから自分が身につけなければならないことは何かを考えたことがある | .57 | .28 | -.05 | .41 |
| 職業人としてはたさなければならない責任と、現在の自分が果たしている責任のちがいを考えたことがある | .56 | .17 | .13 | .37 |
| 自分の経済的な生活を自分で管理するためには、どうしたらよいかを考えたことがある | .53 | .08 | .37 | .42 |
| 経済的に満足できる生活をするために、どのような条件を整えなければならないかを考えたことがある | .51 | .09 | .41 | .44 |
| 自分の能力や性格にあった仕事はどんな仕事かを考えたことがある | .50 | .36 | .01 | .38 |
| 自分が理想とする人間に近づくために、どういうふうに分を変えていけばよいかを考えたことがある | .42 | .36 | .11 | .32 |
| ふだんの生活で能率よく仕事ができるかどうか、自分をためそうと思ったことがある | .42 | .28 | .22 | .30 |
| 職業人の報酬が仕事の内容によって違うのはなぜかを考えたことがある | .39 | .03 | .37 | .29 |
| 学習や仕事やうまくやりとげられたときは満足感が大きいと思ったことがある | .03 | .63 | .09 | .40 |
| やる気になって学習や仕事をするとう効果が上がると思ったことがある | -.00 | .59 | .01 | .35 |
| いろいろな仕事をするとき、その目的がはっきりしていると効果が上がると思ったことがある | .35 | .54 | .03 | .41 |
| 学習や仕事をしていてうまくやれたとき“自分を生かした”と思ったことがある | .20 | .53 | .12 | .34 |
| ふだんの生活の中でやる気のもてる学習や仕事をやりたいと思ったことがある | .31 | .53 | -.02 | .37 |
| 学習や仕事は、目標をめざして努力しなければならないと思ったことがある | .12 | .52 | -.01 | .29 |
| 自分が所属する集団に地位や立場を築くためには、その集団のためにつくさなければならないと思ったことがある | .10 | .50 | .23 | .31 |
| 何かをするときに、それぞれの人の得意な分野を分担し、協力してやりとげようと思ったことがある | .14 | .50 | .08 | .28 |
| 何かをするときに、自分の得意なことは自分がやろうと思ったことがある | .12 | .48 | .18 | .28 |
| いろいろなことを、最後までやりとげることで認めてもらいたいと考えたことがある | .12 | .48 | .34 | .36 |
| 仕事に集中して効果をあげるには、やり方を工夫する必要があると思ったことがある | .21 | .46 | .16 | .28 |
| 自分をためせるような学習や仕事をしたいと思ったことがある | .33 | .43 | .03 | .30 |
| 自分が属している集団(学校や学級、班、クラブ、地域、サークルなど)の中に自分の地位を確立したいと思ったことがある | .09 | .43 | .35 | .32 |
| ふだんの学習や仕事をやったことで、満足したと思ったことがある | .02 | .42 | .04 | .18 |
| ふだんの生活で自分がはたさなければならない役割を考えたことがある | .28 | .42 | .12 | .27 |
| まわりの人からもっと認めてもらうためには、どうしたらよいかと考えたことがある | .23 | .41 | .33 | .33 |
| 仕事の効果をあげるための手順をはっきりさせることが大切だと思ったことがある | .30 | .40 | .19 | .28 |
| 職業についてときには仕事の上での人間関係をよくしなければならなかったと思ったことがある | .31 | .40 | .21 | .30 |
| どのようにしたら効果的に仕事ができるかを考えたことがある | .34 | .38 | .21 | .31 |
| 公平に扱ってもらうために、仕事の評価の基準をはっきり知りたいと思ったことがある | .12 | .10 | .57 | .35 |
| 同じ事をして、他の人だけがほめられて不公平だと思ったことがある | -.14 | .07 | .53 | .31 |
| どのようにしたら物質的に満足できるかを考えたことがある | .33 | .06 | .48 | .35 |
| 自分の行動が、ほめことばやほうびで評価されたと思ったことがある | .10 | .16 | .47 | .26 |
| 品物やサービス、行動が通貨(お金)と交換されているのだと考えたことがある | .26 | -.01 | .44 | .26 |
| まわりの人から、計画的にやりとげることで認めてもらいたいと思ったことがある | .20 | .32 | .43 | .32 |
| 物を買ったり、こづかいをやりくりしたときに、得をしたと思ったことがある | -.00 | .10 | .41 | .18 |
| 学習や仕事の成果は、かかった時間で評価できると思ったことがある | .04 | .01 | .40 | .16 |
| まわりの人から、他の人と違うことをすることで認めてもらいたいと考えたことがある | .18 | .33 | .40 | .30 |
| 将来やってみたい職業をいろいろあげて、賃金と職業の種類との関係を考えてきたことがある | .37 | -.02 | .38 | .28 |
| 何かするとき“手順がはっきりなくてこまった”と思ったことがある | -.10 | .23 | .37 | .20 |
| 自分が属している集団がまわりの人たちにどう思われているかを考えたことがある | .11 | .27 | .33 | .19 |
| 学習や仕事の効果をあげるために、まわりの物や人などがよい環境でなければならないと思ったことがある | .13 | .32 | .26 | .19 |
| 学習や仕事をしていて、予想していなかったところで自分の力がだせたと思ったことがある | .10 | .29 | .20 | .13 |
| 能率よく仕事ができるときのほうが、やる気が出ると思ったことがある | -.01 | .30 | .22 | .14 |
| 短時間で学習や仕事をおわらせる事が、効果をあげる方法の一つだと思ったことがある | .13 | .15 | .26 | .11 |
| 分散 (%) | 10.95 (21.9) | 2.73 (5.5) | 2.16 (4.3) | 15.85 (31.7) |

第 I 因子は、「勤労観」の形成の最終過程である「勤労の効果を自覚する」ことが中心で、将来の職業生活を意識し、仕事や職業を考えたりすること、およびこのような基礎の上に、確かな進路志向を持って職業上の成功を検討することを内容としている。

一方、第 II 因子と第 III 因子は、より基本的な内容とされている「自分の行動の効果を自覚する」、「仕事の効果を自覚する」、「自主的な仕事の効果を自覚する」ことが中心である。第 II 因子は日常の生活における有能性や協力性の発揮、役割の自覚、達成の自覚に関わる項目であった。また、第 III 因子は行動の評価基準に関わる項目であった。したがって、第 I 因子は「職業的自己実現の志向」、第 II 因子は「社会的職業的役割の検討」、第 III 因子は「社会的評価基準の理解」と命名した。

本研究で見出された 3 因子を加部の理論の 5 つの段階と比較すると、加部の理論の基本的な過程と目標的な過程に関連づけられることが確認された。すなわち、低次の 3 つの段階に該当する職業的発達の基本的な過程は、第 II 因子と第 III 因子に対応すること、また、理論のより高次の段階に概ね該当する職業的発達の目標的な過程は第 I 因子に対応することが明らかとなった。

③類型化の手續と類型の特徴

第 I 因子・第 II 因子・第 III 因子の各々の因子得点を用い、得点がプラスである被験者とマイナスである被験者との 2 群に分け、その組み合わせによって被験者を 8 つのタイプに分類した。因子得点の組み合わせと因子の内容に基づくタイプの命名を TABLE 3 に示した。

TABLE 3 職業的発達項目群を構成する因子得点の組み合わせ

| タイプ | 職業的発達因子 | 職業的 自己実現 の志向 | 社会的 職業的 役割の検討 | 社会的 評価基準 の理解 |
|---------------------|-----------|--------------------|---------------------|--------------------|
| 高・職業的 自己実現 志向 | 仕事調和型：A | + | + | + |
| | 役割模索型：B | + | + | - |
| | 評価基準確立型：C | + | - | + |
| | 仕事遊離型：D | + | - | - |
| 低・職業的 自己実現 志向 | 仕事調和型：E | - | + | + |
| | 役割模索型：F | - | + | - |
| | 評価基準確立型：G | - | - | + |
| | 仕事遊離型：H | - | - | - |

8 タイプの概要は、説明力の高い第 I 因子に注目すると、職業的自己実現志向の高・低群別に以下の 4 タイプに大別できる。

高職業的的自己実現志向群はタイプ A, B, C, D で、確かな進路志向に基づいて職業上の成功をめざしているタイプである。一方、低職業的的自己実現志向群はタイプ E, F, G, H である。このタイプは、確かな進路志向をもたず、職業上の成功は考えていない点で、高職業的的自己実現志向群とは対照をなしている。すなわち因子の内容からみると、タイプ A・E, タイプ B・F, タイプ C・G, タイプ D・H はそれぞれ、職業的的自己実現志向の高・低のみにおいて異なるタイプの組合せである。

〈仕事の調和型：タイプ A, E〉

職業的発達のより基本的な段階に関連する項目内容の得点が高く、日常生活において仕事の効果を自覚して生活している。

〈役割模索型：タイプ B, F〉

日常生活の役割に関わる項目の得点は高いが、行動の評価基準に関わる項目の得点は低い。

〈評価基準確立型：タイプ C, G〉

行動の評価基準に関わる項目の得点は高いが、日常生活の役割に関わる項目の得点は低い。

〈仕事遊離型：タイプ D, H〉

職業的発達のより基本的な段階に関連する項目内容の得点が低く、日常生活において仕事の効果を自覚して生活していない。

FIG. 1 に男女別学年別にみた各タイプの比率を示した。高職業的的自己実現志向群の比率は、大学生で最も高く、高校生、中学生の順に低くなる。また、タイプ別にみると大学生では仕事調和型の比率が最も高く、役割模索型、評価基準確立型、仕事遊離型の順に低くなる。一方、中学生では仕事調和型の比率が最も低く、役割模索型、評価基準確立型、仕事遊離型の順に高くなるという傾向がみられる。すなわち、年齢の増加に伴って、低職業的的自己実現志向群が減少、高職業的的自己実現志向群が増加することが明らかとなった。

一方、男子は職業的的自己実現志向の高・低群の割合が学年とともに変化していくのに対し、女子では中学・高校とも 2 年生の高職業的的自己実現志向群の比率が低くなることを見出されている。これらのことから、年齢・性に応じた職業的発達の質的变化に対応するものを類型として見出すことができた (男子 ; $\chi^2=162.07$, $df=42$, $p<.001$, 女子 ; $\chi^2=140.56$, $df=42$, $p<.001$)。

2. 職業的発達の類型と心理—社会的発達との関連

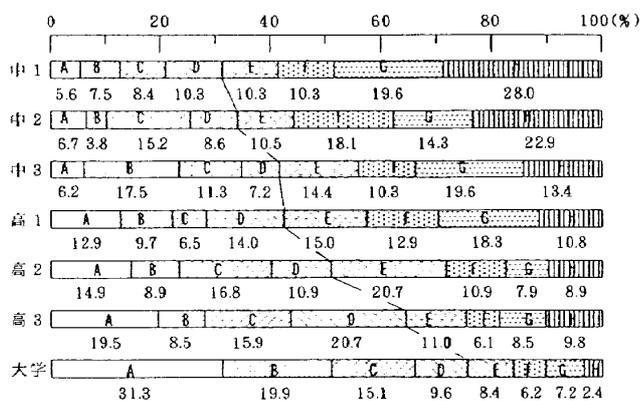
①因子分析の結果：心理—社会的発達

心理—社会的発達 (学童期・青年期) の全項目について、主成分分析とバリマックス回転を行い、学童期に

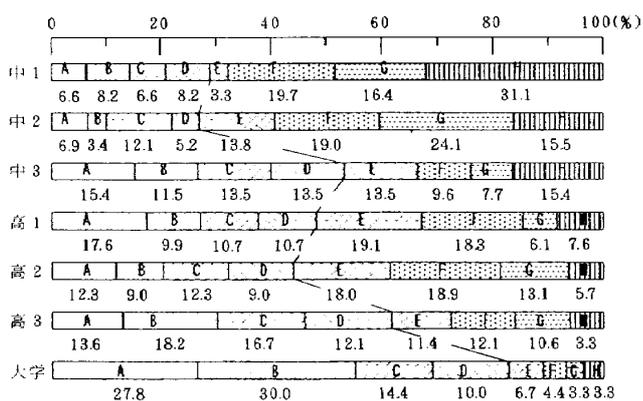
ついて5因子, 青年期について4因子を抽出した。各項目および因子負荷量はTABLE 4に示した。

学童期については, 第I因子を社会に通用する人間としての自信をもってチャンスをつかむという内容から「自己有能感」, 第II因子を対人関係の技術や価値を理解して行動するという内容から「社会的役割理解」, 第III因子を創造的・積極的・意欲的な自己を肯定するという内容から「肯定的自己評価」, 第IV因子をまわりの目や決めつけを気にして振り回されるという内容から「他者評価による葛藤」, 第V因子を対人関係並びにお金や物のやりくりに不安を持ち, 生き方に見通しがもてないという内容から「社会的技能習得の不安」と命名した。

<男子>



<女子>



高・職業的自己実現志向
 A - 仕事調和型
 B - 役割模索型
 C - 評価基準確立型
 D - 仕事遊離型
 低・職業的自己実現志向
 E - 仕事調和型
 F - 役割模索型
 G - 評価基準確立型
 H - 仕事遊離型

FIG. 1 男女別・学年別にみた各タイプの比率

青年期については, 第I因子を, 選択決定に自信をもち, 同一性達成の感覚に基づいて行動するという内容から「個人的選択に対する確信」, 第II因子を, 両親の価値を受け容れ, 自分の生き方を心から納得しているという内容から「社会的役割に対する自信」, 第III因子を, 理想の自己を特定できず, 現実の自己があいまいであることで悩むという内容から「将来に対する不安」, 第IV因子を, 集団と個人との関係や仲間意識のもち方がわかるという内容から「集団への所属」と命名した。

②職業的発達因子と心理-社会的発達因子間の関連

心理-社会的発達9因子と職業的発達3因子の対応を見るために, 学童期・青年期のそれぞれの因子得点について, 職業的発達3因子のそれぞれに関して各タイプ間で平均の差を検討した (TABLE 5)。

職業的発達2因子の組み合わせが等しく, 「職業的自己実現の志向」因子の高低のみにおいて異なるA-E, B-F, C-G, D-Hのタイプ間の比較において共通して差の認められる因子は「肯定的自己評価」「個人的選択に対する確信」因子であった。すなわち, 職業的発達の「職業的自己実現の志向」因子は心理-社会的発達の「肯定的自己評価」「個人的選択に対する確信」因子に関連していることが明らかになった。

同様に「社会的職業的役割の検討」因子の高低のみにおいて異なるA-C, B-D, E-G, F-Hの比較において共通して差の認められる因子を検討した結果, 職業的発達の「社会的職業的役割の検討」因子は心理-社会的発達の「社会的役割理解」「肯定的自己評価」「個人的選択に対する確信」「社会的役割に対する自信」因子に関連していることが明らかになった。

また, 「社会的評価基準の理解」因子の高低のみにおいて異なるA-B, C-D, E-F, G-Hの比較において共通して差の認められる因子の検討から, 職業的発達の「社会的評価基準の理解」因子は心理-社会的発達の「自己有能感」「肯定的自己評価」「将来に対する不安」因子に関連していることが明らかになった。

以上のことから, 職業的発達の項目群における各因子の特質を心理-社会的発達からみると, 職業的自己実現の志向が強い場合には, 自己評価が肯定的で, 選択に対して確信が強い。また, 社会的職業的役割の検討を行う場合には, 自己評価が肯定的で, 選択に対する確信が強く, 加えて, 役割期待が明確で自信をもって行動する。さらに, 社会的評価基準を理解している場合には, 自己評価が肯定的で有能感をもち, 将来に対する不安は少ないことが明らかとなり, 職業的発達

TABLE 4 心理・社会的発達の各項目の因子負荷量

| <学 童 期> | 項 目 | I | II | III | IV | V | h ² |
|---------|--|-------------|-------------|------------|------------|------------|----------------|
| ▼ | 私は他の人のようにうまくチャンスをつかむことができないので、いつもはじのほうでウロウロしているような気がする | .72 | .05 | .09 | .12 | .07 | .54 |
| ▼ | 私は社会で通用しない人間だと思う。母親も不安がっているようだ | .63 | .10 | .13 | .12 | .30 | .52 |
| ▼ | 私はわざとらしくても、自分を「ヨイショ」してくれるような人がいないと自信がなくなってしまうと思う | .57 | -.06 | -.14 | .10 | .24 | .41 |
| | 私は自分の競争心を、遊びやスポーツでじょうずに発散できる | .50 | .40 | .22 | -.06 | -.22 | .51 |
| ▼ | 私は普通の人と比べて、男らしさ（または女らしさ）がたりないと思う | .49 | -.07 | .30 | .02 | .14 | .35 |
| ▼ | 私は、学校生活の中で、働くことの喜びや何かやりとげることのすばらしさを経験できなかったことは、何かさびしい気がする | .30 | -.15 | .15 | .26 | -.21 | .24 |
| | 私は、人々が気持ちよく生活できるように元気づけたり、なぐさめたり、相談にのったりすることは、何よりも大切なことだと思う | .07 | .75 | -.03 | -.07 | -.03 | .57 |
| | 私は一生懸命努力して、がまん強く“仕事をやりとげる”ことを最高の喜びだと思う気持ちになることができる | -.12 | .65 | .16 | .02 | .17 | .49 |
| | 私は、心から尊敬できる先生や私のかくれた才能をのばしてくれた先生と出会えたことは、決して忘れることのできない経験だったと思う | -.00 | .62 | .17 | .05 | -.03 | .42 |
| | 私は自分が物を作ったり、使いやすいうように直したり、完全なものにしていくことのできる人間だと思っている | -.03 | .09 | .70 | -.01 | .18 | .53 |
| | 私は知りたがりで、自分から確かめてみようとする積極的な小学生だった | .03 | .11 | .69 | .01 | -.10 | .49 |
| | 私は自分が何かの役にたつ人間だと思っている | .27 | .15 | .56 | -.02 | .08 | .41 |
| | 私の小学生時代は、遊びではおおいに楽しみ、勉強ではやらなければならないことを学ぶというように、バランスのとれた生活だった。 | .17 | .34 | .39 | .14 | .03 | .32 |
| ▼ | “いい子”とか“勉強ができて言うことをよくきく子”とかということ型にはめられると、学校にいきたくなくなったり落ちこんだ気分になる | .22 | -.05 | .04 | .76 | .02 | .63 |
| ▼ | 人に“不良”とか“非行少年”と思われることに気がつくとき、意地でもその通りになってやろうと思う | -.06 | .21 | -.01 | .74 | .25 | .65 |
| ▼ | 私は、うわべだけでほめられたり、恩をさせるように励まされると、ひどく悩んでしまう | .41 | -.30 | -.08 | .45 | -.20 | .50 |
| ▼ | 私は、お金をじょうずに使ったり、ものを大切に扱う能力に自信がない | .06 | -.02 | .26 | .10 | .66 | .52 |
| ▼ | 私は人と話をするとき、相手をちゃかしたり、からかったりする話し方でないと、なかなかうちとけられない | .24 | .14 | -.20 | .04 | .62 | .51 |
| ▼ | 私には、これからの私の生き方が何通りもあるということがよくわからない | .26 | -.08 | .27 | .00 | .40 | .31 |
| | 分 散 (%) | 3.27 (17.2) | 2.13 (11.2) | 1.29 (6.8) | 1.18 (6.3) | 1.07 (5.6) | 8.94 (47.1) |

(▼は逆転スケールである)

| <青 年 期> | 項 目 | I | II | III | IV | h ² |
|---------|--|-------------|-------------|------------|------------|----------------|
| | 私は、自分の考えで選んだり、決めたりすることに自信を持っている | .67 | .12 | .19 | -.09 | .51 |
| | 私は他人とのつきあいの中で、自分が自分以外の何者でもないことを確信している | .67 | -.01 | .01 | -.02 | .45 |
| | 私は、いつも未来に向かって一歩ずつ確かに進んでいると信じている | .62 | .31 | .02 | .07 | .49 |
| | 私は、自分が今の社会の中で生きがいを見つけ、そのために自分を成長させていける人間だと思っている | .61 | .41 | -.04 | .06 | .54 |
| | 私は、まわりの人の考えや行動に左右されなくて、いつも正しい決定ができる | .58 | .26 | .22 | -.06 | .46 |
| | 私の生きがいは、“仲間”とか“物を作る仕事”“社会での活動”“科学的な探求”“芸術的な活動”の中にある | .52 | .04 | -.15 | .04 | .29 |
| | 私は、小さいときから両親の言いつけを守ってきたので「健康である」「わがままを言わない」ということで認めてもらうことの大切さを知っている | -.07 | .68 | -.20 | .08 | .52 |
| | 私は、自分の欲求や衝動をコントロールできると信じている | .23 | .56 | .06 | -.06 | .37 |
| | 私は、自分がどんな人間なのか、どうなりたいたのか、他人にはどのようにみえるのか、ということ自分を自分が本当にわかっていると思う | .20 | .54 | .15 | -.25 | .41 |
| | 私は、今の私の生き方を心から納得している | .25 | .52 | .26 | -.06 | .40 |
| | 私は、自分がこれからどんどん魅力的な人間になっていくと信じている | .44 | .51 | -.13 | .15 | .49 |
| ▼ | 今までに身につけた役割や技能を、現代の理想的な行動のしかたにどうやって結びつけたらいいのか、わからなくて悩んでしまう | -.05 | .03 | .73 | .11 | .55 |
| ▼ | 私には“理想の自分”がたくさんあって、どれが本当に“なりたい自分”なのか、さっぱりわからなくなっている | .14 | .05 | .72 | .02 | .54 |
| ▼ | 私のまわりでは、いろいろな場面で、いろいろな変化がおこるので、すっかり疲れて不安でたまらず、自分が何者なのかさっぱりわからなくなっている | .10 | .11 | .69 | .13 | .52 |
| | 私が異性が友人とおしゃべりするのには、自分を確かめるためである | .19 | .26 | -.44 | -.06 | .31 |
| ▼ | 今の時代には、人間を機械の一部のように扱わなければ解決できない問題が多い | -.08 | .11 | .14 | .79 | .66 |
| ▼ | 仲間意識を高めるために、同じ洋服を着たり、しぐさやマークなどを使ってメンバーとメンバー以外を区別することが必要だ | .10 | -.17 | .13 | .63 | .46 |
| | 分 散 (%) | 3.73 (22.0) | 2.06 (12.2) | 1.09 (6.6) | 1.07 (6.3) | 7.95 (46.9) |

(▼は逆転スケールである)

TABLE 5 各タイプ間の差の検定

| | | 高・職業的自己実現志向 | | | | 低・職業的自己実現志向 | | | |
|-------------|--|--|--|--|--|--|---|-----------|---------|
| | | A 仕事調和型 | B 役割模索型 | C 評価基準確立型 | D 仕事遊離型 | E 仕事調和型 | F 役割模索型 | G 評価基準確立型 | H 仕事遊離型 |
| 高・職業的自己実現志向 | B 役割模索型 | FSG1 -2.00* FSG3 2.90** FSG5 -2.13* FSH3 -4.03*** | | | | | | | |
| | C 評価基準確立型 | FSG1 2.01* FSG2 7.98*** FSG3 3.33** FSH1 4.83*** FSH2 2.94** FSH4 2.55* | FSG1 4.27*** FSG2 7.08*** FSG4 2.05* FSG5 3.43** FSH1 5.43*** FSH3 2.87** FSH4 3.83*** | | | | | | |
| | D 仕事遊離型 | FSG2 8.42*** FSG3 5.79*** FSH1 3.35** FSH2 4.45*** FSH3 -4.85*** | FSG2 7.52*** FSG3 2.88** FSG5 2.57* FSH1 3.90*** FSH2 3.22** | FSG1 -3.28** FSG3 2.89** FSH3 -3.82*** FSH4 2.19* | | | | | |
| 低・職業的自己実現志向 | E 仕事調和型 | FSG3 4.08*** FSH1 5.18*** FSH2 2.51* | FSG1 2.05* FSG5 2.38* FSH1 5.72*** FSH3 2.78** | FSG2 -6.09*** FSH4 -3.58*** | FSG2 -6.65*** FSH2 -2.07* FSH3 3.68*** | | | | |
| | F 役割模索型 | FSG1 -2.12* FSG2 2.71** FSG3 7.54*** FSG4 -2.33* FSH1 5.66*** FSH2 3.93** FSH3 -4.71*** FSH4 -2.34* | FSG2 2.19* FSG3 4.44*** FSG5 2.81** FSH1 6.12*** FSH2 2.68** | FSG1 -4.40*** FSG2 -4.98*** FSG3 4.53*** FSG4 -2.89** FSH3 -3.58*** FSH4 -4.92*** | FSG2 -5.61*** FSH4 -2.38* | FSG1 -2.17* FSG3 3.17** FSG4 -2.01* FSH3 -3.47** | | | |
| | G 評価基準確立型 | FSG2 7.66*** FSG3 6.80*** FSG5 2.66** FSH1 8.73*** FSH2 4.94*** FSH3 -3.18** | FSG1 2.98** FSG2 6.80*** FSG3 3.69*** FSG5 4.76*** FSH1 9.07*** FSH2 3.61*** FSH3 3.06** | FSG3 3.75*** FSH1 4.14*** FSH2 2.02* FSH3 -1.99* | FSG1 2.09* FSH1 4.26*** | FSG2 5.88*** FSG3 2.40* FSG5 2.27* FSH1 3.52*** FSH2 2.37* FSH4 2.86* | FSG1 3.19** FSG2 4.85*** FSH1 2.59* FSH4 4.16*** | | |
| H 仕事遊離型 | FSG1 -2.46* FSG2 10.51*** FSG3 11.73*** FSG4 -3.69*** FSH1 11.31*** FSH2 6.00*** FSH3 -9.13*** | FSG1 9.44*** FSG2 8.51*** FSG5 2.91** FSH1 11.39*** FSH2 4.63*** FSH3 -5.30*** | FSG1 -4.80*** FSG2 3.06** FSG3 8.96*** FSG4 -4.08*** FSH1 7.08*** FSH2 3.23*** FSH3 -8.22*** FSH4 -3.18** | FSG3 5.34*** FSG4 -2.73** FSH1 6.73*** FSH3 -4.11*** | FSG1 -2.51* FSG2 8.63*** FSG3 7.09*** FSG4 -3.32** FSH1 6.43*** FSH2 3.54*** FSH3 -7.91*** | FSG2 7.57*** FSG3 4.02*** FSH1 5.42*** FSH2 2.18* FSH3 -4.47*** | FSG1 -3.51** FSG2 2.63** FSG3 5.01*** FSG4 -2.38* FSH1 3.26** FSH3 -6.14*** FSH4 -2.45* | | |

FSG1~5・FSH1~4は心理-社会的発達因子 数字はt値を表わす。

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

〔仕事遊離型〕：「社会的役割理解」「肯定的自己評価」の因子得点が低い。さらに「将来に対する不安」が高く、見通しのもてないタイプである。また、職業的自己実現志向の高低の差は、「肯定的自己評価」「他者評価による葛藤」「個人的選択に対する確信」「将来に対する不安」の差に認められた。

以上のように、職業的発達の各々のタイプを特徴づけている心理—社会的発達の因子が確認され、自我の発達と職業的発達の過程の対応が明らかとなった。

④類型の性差と心理—社会的発達の因子との関連

〔仕事調和型〕：心理—社会的発達の各因子の因子得点について、高職業的自己実現志向群では「肯定的自己評価」(男子 $\bar{x}=.7470$, $SD=.973$; 女子 $\bar{x}=.2173$, $SD=.940$; $t=4.00$, $p<.001$), 「集団への所属」(男子 $\bar{x}=-.2578$, $SD=1.108$; 女子 $\bar{x}=.2886$, $SD=.958$; $t=3.80$, $p<.001$) に性差が認められた。

一方、低職業的自己実現志向群では「自己有能感」(男子 $\bar{x}=.1399$, $SD=1.029$; 女子 $\bar{x}=-.3097$, $SD=1.095$; $t=2.83$, $p<.01$) 「肯定的自己評価」(男子 $\bar{x}=.3340$, $SD=1.083$; 女子 $\bar{x}=-.1905$, $SD=.895$; $t=3.51$, $p<.01$) 「個人的選択に対する確信」(男子 $\bar{x}=.1539$, $SD=.833$; 女子 $\bar{x}=-.2603$, $SD=.894$; $t=3.21$, $p<.01$) に性差が認められた。

〔役割模索型〕：性差は、高職業的自己実現志向群で「肯定的自己評価」(男子 $\bar{x}=.4249$, $SD=.948$; 女子 $\bar{x}=-.0028$, $SD=.965$; $t=2.96$, $p<.01$) 「個人的選択に対する確信」(男子 $\bar{x}=.7238$, $SD=1.009$; 女子 $\bar{x}=.3381$, $SD=.954$; $t=2.60$, $p<.01$) に認められた。

一方、低職業的自己実現志向群では、「自己有能感」(男子 $\bar{x}=.4311$, $SD=1.026$; 女子 $\bar{x}=-.0517$, $SD=.872$; $t=3.36$, $p<.001$) 「社会的役割理解」(男子 $\bar{x}=-.0549$, $SD=.888$; 女子 $\bar{x}=.4058$, $SD=.809$; $t=3.58$, $p<.001$) 「将来に対する不安」(男子 $\bar{x}=.3231$, $SD=.990$; 女子 $\bar{x}=-.0147$, $SD=.957$; $t=2.29$, $p<.05$) に認められた。

〔評価基準確立型〕：性差は、高職業的自己実現志向群で「肯定的自己評価」(男子 $\bar{x}=.4356$, $SD=.829$; 女子 $\bar{x}=-.1044$, $SD=.801$; $t=4.41$, $p<.001$) 「個人的選択に対する確信」(男子 $\bar{x}=.1296$, $SD=.826$; 女子 $\bar{x}=-.1515$, $SE=.811$; $t=2.29$, $p<.05$) に認められた。

一方、低職業的自己実現志向群では「肯定的自己評価」(男子 $\bar{x}=-.0305$, $SD=.826$; 女子 $\bar{x}=-.3569$, $SD=.961$; $t=2.35$, $p<.05$) に認められた。

〔仕事遊離型〕：性差は、高職業的自己実現志向群では「集団への所属」(男子 $\bar{x}=-.1999$, $SD=1.093$; 女子 $\bar{x}=.1913$, $SD=1.009$; $t=2.30$, $p<.05$) に認められた。

一方、低職業的自己実現志向群では「社会的役割理

解」(男子 $\bar{x}=-.7775$, $SD=1.124$; 女子 $\bar{x}=-.3159$, $SD=.874$; $t=2.77$, $p<.01$) に認められた。

以上のことから、各タイプを通して、男子では「自己有能感」「肯定的自己評価」「個人的選択に対する確信」の因子得点が高いのに対し、女子は「社会的役割理解」「集団への所属」が高いことが認められた。

すなわち、各タイプを通して性差が認められること、各タイプの性差と関連の深い心理—社会的発達の因子が明らかになったことから、男子の職業的発達過程と女子の職業的発達過程が異なることが示唆された。

3. 類型化の意義

心理—社会的発達の各因子の因子得点について、タイプ間で平均の差の検定を行った結果はTABLE 5のとおりである。各タイプ間の有意の差に注目して8タイプを比較すると、有意差の多い順に、A, B, E, F, C, D, G, Hとなる。この順序は、職業的発達の過程と対応していると考えられる。

高職業的自己実現志向群はタイプA, B, C, Dで、確かな進路志向に基づいて職業上の成功をめざしているタイプである。これらが上位4位に並ばないということから、社会的職業的役割の検討や社会的評価基準の理解といった日常生活における仕事に対する理解が職業的発達を促すこと、そのような理解なく職業的自己実現志向だけが強い場合、職業的発達は遅れていることを示唆している。すなわち、(1)得点が高いことが発達と対応しているとはいえないこと、(2)職業的発達の8類型の順序で示されるような質的な変化として発達の過程を検討することが必要であることが確認された。

この研究では職業的発達の類型化によって8類型を記述し、それらが年齢や性に対応することを明らかにした。しかし、個人のレベルでの発達の過程を含め、タイプ間の移行の要因、および移行の過程における性差の分析については今後の検討課題である。

職業的発達の解明のためには、職業的発達に関連する要因として、社会との関わりにおける性差を考察しなければならない。すなわち、類型化は性役割との関わりで考察されなければならないと考えられる。

本研究においては、「勤労観」の形成に基づき、職業的発達過程について考察した。しかし、仕事役割への関与と価値期待を内在化するという側面からのアプローチもまた必要である。これは、職務関与の意識の発達としてとらえることができる。また、性差に対応した類型化の有効性の検討に示唆を与えるものであると考えている。すなわち、各タイプを解釈するために

は心理—社会的発達および職務関与に関わる意識の発達との関連を統合して考察していく必要がある。

引用文献

- Crites, J.O. 1974 The Career Maturity Inventory. In Super, D.E. (Ed.) *Measuring Vocational Maturity in Counseling and Evaluation*. Washington, D.C. : National Vocational Guidance Association.
- 遠藤辰雄・安藤延男・井上祥治・峰松修・冷川昭子 1976 Ego-Identity の研究(6) 日本心理学会第40回総会発表論文集, 927.
- 遠藤辰雄(編) 1981 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版
- ハヴィガースト, R.J. 荘司雅子(訳) 1958 人間の発達課題と教育—幼年期から老年期まで— 牧書店 (Havighurst, R.J. 1953 *Human Development and Education*. New York : Longmans, Green & Co., INC.)
- Havighurst, R.J. 1972 *Developmental Tasks and Education*. New York ; Longmans, Green & Co., INC.)
- 加部祐三 1982 勤労観を育てる進路指導 筑波書房
- 望月葉子 1988 青年期における職業的発達と心理—社会的行動特性 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 348—349.
- Munley, P.H. 1975 Erik Erikson's Theory of Psycho-social Development and Vocational Behavior. *Journal of Counseling Psychology*, **22** (4), 314—319.
- Munley, P.H. 1977 Erikson's Theory of Psycho-social Development and Career Development. *Journal of Vocational Behavior*, **10**, 261—269.
- 中西信男・竹内登規夫・那須光章 1980 進路発達調査手引 実務教育出版
- スーパ D.E. 日本職業指導学会(訳) 1960 職業生活の心理学 誠信書房 (Super, D.E. 1953 *The Psychology of Careers*. New York : Harpar & Brothers.)
- Super, D.E. 1983 Assessment in Career Guidance : Toward Truly Developmental Counseling. *Personnel and Guidance Journal*, **61** (9), 555—562.
- 竹内登規夫 1979 進路成熟に関する多次元分析 応用社会学研究, **20**, 93—116.

付 記

本論文は、東京学芸大学教育学研究科に提出した修士論文(1987年度)の一部を加筆修正したものです。論文の作成にあたり、御指導いただいた東京学芸大学の八野正男先生、斉藤耕二先生、上野一彦先生、高橋道子先生に深く感謝申し上げます。

(1989年6月1日受稿)